

---

F R E E   F R E E   F R E E

bright\_country

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FREE FREE FREE

### 【Zコード】

Z0466B

### 【作者名】

bright\_country

### 【あらすじ】

あなたは今の生活に満足していますか？「自由が欲しい」その言葉は、若者が口にする、ありきたりな言葉です。あなたのいう「自由」となんですか？これは、「寮生活」という自由とはかけ離れた環境。そんな中で生活する一人の高校生が、必死で自由を手に入れようとする、笑いあり、感動ありの青春小説。あなたの「退屈」な生活にきつと何かを「える」でしょう。

## 自由への願望

耳障りな音楽で、目を覚ました。枕が足元にある。寒い。毛布はベッドからずり落ち、おれの体はこの朝の寒さをもろに受けてしまつていた。廊下では、寮生達の足音が聞こえる。おれは毛布を掛けなおさうと、左手を伸ばし、毛布をつかんだ。しかし持ち上げる気力は、もう無かつた。

廊下のスピーカーから流れむるの大音量の音楽は、一階にいる寮監督によつて、毎朝7：20分に流される。その音楽に目を覚ました寮生たちは、7：30からの「朝の集い」のために、一回ワウンジに集合するのだ。

うんざりしていた。この縛られた環境に。自由の無い環境に・・・。

音楽が鳴り終わつた。もつ頭の中では、今流れていた音楽が何なのか、分からなくなつっていた。いつからこんなに目覚めが悪くなつたのだろう。目覚まし時計を見ようとするが、動くことを完全に拒否してしまつたおれの体はその「時計を見る」という行動でさえ受け入れなかつた。

（大丈夫・・・あと3分くらい・・・）

音楽が消え、静かになつた部屋の中で、おれの意識は再び遠のいていった。

ドンードンードン！

反射的に半身を起き上がらせていた。

（しまつた！）

叩かれたドアを見てみると、のぞき窓から一つの目が、おれの顔を不機嫌そうに睨んでいる。きっとあの目は将平だろ。

(・・・またやつちまつたか。)

目に違和感がある。将平の顔が認識できるところとは、おれの目にはコンタクトレンズが入つたままなのだろう。昨夜いつ瞬りについたのか、思い出せなかつた。ドアの鍵を開け、おれは廊下に出た。

「すまんな・・・」

将兵は何も言わなかつた。おれに目を合わせることも無く、不機嫌そうな顔で階段へと向かつた。寮生同士の朝は、こんな感じでお互い不機嫌だ。普通の家庭でも、朝はどうもイライラして、親や兄弟に当たつてしまつだらう。それが俺たちは、この「寮」という環境の中だから、その矛先は同じ寮生、つまり友人に向けられる。こんなやり取りの後に言うのもなんだが、将平はおれの親友だ。そんな仲の二人でさえ、朝はこういう状況になつてしまふのだ。

おれ 横原秀明は、今から一年前、せいめい誠明高校に入学した。それは同時に、誠明寮への入寮も意味する。そう、この誠明高校はいわゆる全寮制の高校だ。

おれはタオルを取つて洗面所に向かい、顔を手早く洗つてそのままラウンジに駆け下りた。ラウンジに下りると寮生たちが、眠そうな顔をしながら座り込んでいる。「朝の集い」が始まつてゐるのだ。その固まりとは少しはなれた後ろ側で、3・4人の生徒が眠そうな顔をして正座していた。おれと同じように寝坊した奴らだ。この朝の集いに遅刻すると、集い中は正座、集い後はラウンジの雑巾掛け、

とこゝしうつもない罰が課せられる。当然ながら今日はおれも対象者だ。しぶしぶその「遅刻組」の中に正座をした。前を見ると、寮監督の松岡がおれを睨んでこる。どうやらおれが最後の遅刻者だつたらしい。

「集い」とは言つても、寮内の連絡を、この寮監督がおれたちに伝えるだけだ。主たる目的は、寮内に生徒が全員いるか確かめることだつた。松岡がなにか連絡しているようだが、再び眠気が襲い、全く耳に入つてこなかつた。朝っぱらからこんなおつさんの話に耳を傾ける奴なんか、この中にはいないので。

集いが終わり、寮生たちは食堂へと向かつた。

「おい。遅刻した奴らはちやんと雑巾がけしてから行けよ。」

（分かつてゐるわボケ。）

おれは眠氣と戦いながら、濡らしてもいい雑巾を手に取り、適当に地面の上を滑らせた。松岡がおれを見下ろし、腕組して立つてゐる。

（なんだか・・・おまえの朝の選曲が最悪なんだうが・・・）

雑巾を滑らしながら、思い出していた。今朝流れていた曲は懐かしい、あの「E-H-E 虎舞竜」の「ロード」だつたのだ。確かに名曲だが、朝の目覚まし曲がこれはないだろう。

松岡があれたちを監視するのをやめ、事務室に入つていつた。おれはすぐさまその乾いた雑巾を放り投げ、食堂へ向かつた。すると、わざわざおれを起こしに来た将平が靴箱で待つっていた。

「おひ、待つてたんか。」

「・・・ああ

おれと同様、まだ眠そうな顔をしながら言った。

朝食を終え、部屋に戻った。この後、寮生は30分ほどで学校に行く準備をしなければならない。おれが部屋に着いた頃には皆、洗面所や廊下に集まっていた。将平が口に歯ブラシを突っ込んだまま、洗顔中の坂口をいたずらに蹴っている。パンツ一枚の谷口が、鏡を相手に髪を整えていた。

この30分という時間内で学校に行く準備を全て終えるのはなかなか大変だった。その上、寮生の生徒数に対して、水道やトイレの数が少なすぎるのだ。

「おに橋本おーはよせえやー！待つとんじやー！」

「ちよい待つてえな。もうすぐ出でんなんじやけん。」

そんな便器ドア越しの会話も、毎朝のよつなことだ。

「ああー紙無いやんー！」

橋本の情けない声が聞こえる。

「誰か取つてえなー！」

「どあほーーおまえが毎晩そこでじこじるけんすぐ無くなるんだろーがー！」

洗面所からの佐竹の言葉に、髪をこじつている谷が笑っていた。

「おれ！」一週間ぶりに我慢しどんじやかん！」

「そんなんどうでもいいわあーほんと終わらねやー」

ドアの前で橋本が出るのを待つ外山が怒鳴った。

歯ブラシをくわえた将平が、地面に転がっているトイレットペーパーを取り上げ、橋本の入っている便器の個室に上から思いつきりダンクした。鈍い音が聞こえて、橋本の情けない声が聞こえた。おれたちはそれを笑いながらみていた。

やつべ！制服洗つてなかつた！誰か制服貸してえや。

洪顔を終えた坂口が言つた。

おれの貸したとか?」「

橋本を馬鹿にしていた佐竹が、そういうって言って部屋に帰り、シワのYシャツを手に戻ってきた。

昨日干したはさかであんま乾いてないけどな

そう言いながら坂口に渡したそのシャツは、水分をたっぷり含み、向こう側が透けて見えていた。

「いやいや！全然乾いてないやん！」

坂口は苦笑しながら、そのシャツを受け取った。当然ここは男子寮であり、女子寮とは別所となつていて。男子だけの生活の場でこそ言まる、ここに男臭い生活はおれは嫌いではなかつた。

そんなことをしているうちに、もう登校時間になつてしまつた。も

う何人かの生徒は学校へ向かつたようだ。おれは部屋で、コンポから流れるCHEMISTRYの音楽を聴きながら、ネクタイを締めていた。鏡を見ようと、身をかがめた。不意に、電気が消え、音楽が止まる。

(くそ！松岡め・・・)

各部屋の電気設備は、下の事務室にあるブレーカーによつて管理されている。松岡が寮生を早めに部屋から出すために、全部屋のブレーカーを落としたのだ。

電気さえ管理されているといつここの状況に、毎朝憤りを感じていた。なんで高校生のおれたちが、こんな見知らぬおっさんの管理下で生活させられているのだろうか。全寮制の高校を選んだ理由の一つに、親からの縛り付けから逃れたい、という気持ちもあつた。高校生だけの、大人のいない自由に憧れてと共にこの寮に入ったのだ。一年経つた今、おれは現実の生活に失望していた。

着替え終えたおれは、スクールバッグを手に取り部屋を出た。

「将平！もう行かなやばいぞ！」

「待つとけえ！」

将平の声が部屋の中から聞こえてきた。おれと将平の部屋は3つ隣の部屋に位置する。この親友も、おれと同様、この生活に不満を抱いている一人だ。おれたち二人は階段を下りながら愚痴つていた。

「松岡の野郎ブレーカー落とすの早すぎだろー？」

「なあ！？あほかあいつ！？そんで自分はのんびり事務室でコーヒー飲んでんだろ！？」

将平が壁を殴つて言つた。

「ほんと何様のつもりなんやなあ・・・あのおやじ。」

「ああ！まじむかついてきた！」

今度蹴りを入れた言つた。

「ゴッ

とてつもない音がした。同時に俺たち一人は固まつた。おれはこいつを止めなかつたことを、後悔していた。なんでこう手加減知らずなんだこの男は。階段の白い壁には、直径50cm程度の巨大な穴が、見事に空いていたのだ。

「おい・・・これやべえつて・・・」

寮内の公共物破壊には、他の違反より、ずっと大きな罰が課せられる。しかもおれには、このような前科が幾度か有つた。そして最悪なのが、今日の寮監督担当が、松岡だということである。寮監督は4・5人ほどの人数でローテーションされている。その中でも寮生たちから最も恐れられているのが、この松岡なのだ。もしあいつがこれを知れば、怒り狂うのは目に見えている。まして前科のある将平だ。あの松岡なら停学処分の可能性もある。おれはまだパラパラと崩れる落ちる穴を見ながら言つた。

「逃げよつぜ。今ならばねえつて。部屋にもまだ何人か残つてゐはず・・・」

突然、将兵がおれの言葉をさえぎるように手を上げた。将平の顔を見た。その目は、階段の下に釘付けになっていた。いやな予感がした。おれはその視線の先を見た。

(・・・終わりだ・・・)

絶望的だった。そう、松岡が立っていたのだ。きっと今の轟音を聞き、かけつけたのだろう。彼の手は思いつきり握り締められ、わなわなと震えていた。額に浮かぶ血管がしつかり目に取れた。

(何もそこまで怒らんでも・・・)

為す術も無く、おれたち一人は立ち尽くしていた。

「ひひあーおまえらあ！ー！」

松岡の怒鳴り声が、寮内に響き渡る。おれたちは咄嗟に、今下りてきた階段を再び駆け上がり、全速力で逃げ始めた。何故走り出したかは分からない。もう見つかったのだ。逃げてももう何の意味も成さないのだ。でも俺たちは走り出した。まるで長い間、この時を待つっていたかのようだ。

「何逃げとんじゃ」いらあー止まれー！

止まるわけ無いだろ。おれは将兵の後ろを走っていた。廊下では、やつと服を着替え終わつた谷口が、おれたちをみておもしろそうに笑つている。こういう時、怒られる対象の人間は必死だが、それを見る傍観者といつのはのん気なものだ。将平は笑う谷口を蹴り飛ばし、おれの部屋の前まで来たところで、後ろを振り向いた。

「おこーはよ鍵あけやー。」

「まじでーせかすなやー。」

後ろから松岡が追つてくる足音が聞こえる。おれは鍵を刺し、部屋のドアを開けた。何故か笑がこみ上げてきた。松岡に捕まつたら、もうただじやすまない。いや、捕まらなかつたとしても、どうせまた学校から帰れば俺たちは寮に帰るのだ。俺たちのやつていることは全く持つて無意味だつた。そんな絶望的な状況の中で、何故かおれは、いや将平までもが笑つていた。こんな恐怖と緊張は、寮生活をしている俺たちには、経験することはない。久々のスリルに、俺たちは自然と笑みがこぼれていたのだ。

ドアが開いた。まず将平が入り、次におれが入る。速攻でドアを閉めた。

「おー！鍵閉めろー！とつあえずベランダ出るやー。」

将平に言われまでもなく俺は鍵を閉めていた。再び松岡の声が響いた。

「おまえら自分が何やつてんのか分かってんのかあー。」

そりやわかつてますよ。部屋の中が見えないよう、ドアの覗き窓を朝使つて投げ捨てたタオルをガムテープで止め、覆い隠した。おれは将平を見た。ベランダに出る窓の前で、何か苦戦している。

「なんでおまえの部屋の窓開かんのじゃあー。」

「ああー。」

忘れていた。おれはベランダエロ口本を隠していたのだ。さらに誰にも見られないためにも、細工して鍵が開かないようにしていったのだ。決して見られるのが恥ずかしいとか、そういう理由で隠したわけではない。この男集団が生活するこの寮内で、エロ口本は存在が発覚した途端、すぐさま取り合いが始まってしまう。おれは誰にも汚されたくないお気に入りの3冊を、そこに隠していたというわけだ。こんな場面であだとなるとは・・・

### チャリン

おれたちはその音に、敏感に反応した。ドアの向こうで聞こえる音。そう、この音におれたち寮生は、恐怖を覚

えている。寮監督が持つ、マスターキーの音だ。鍵を閉めただろう俺たちの行動を見て、ポケットからあの鍵を出したのだろう。マスターキー。つまりどの部屋の鍵でも簡単にあけてしまう。おれたち寮生の最大の敵。寮監督はめったにこのマスターキーを使うことは無い。部屋内に違反物や他室訪問者を見つけた時など、強制的に生徒の部屋に入らなければならない時にのみ使うのだ。だからこそ、おれたちはこの金属音に敏感になつた。その音が、だんだん近づいているのが分かる。

「くそーしゃあないな・・・」

そういうと将平はおれの部屋にあつた竹刀を手に取つた。三日ほど前の夜、おれはわけあってどうしても空腹に耐えれなかつた。おれは剣道部の佐竹から竹刀を奪い取り、そのまま橋本の部屋へ押し入つた。竹刀を振り回し、縮み上がつた橋本から、チーズパンとじやがりこを奪い取つた。そのときの竹刀をそのまま部屋に置いていたのだ。まさか、と思ったのもつかの間、将平は思いつきり竹刀を振りかぶつた。

「おいやめろおー。」

エロ本のありががばれてしまつのが嫌だつたからではない。壁に風穴をあけた上に、こんなしようもないことで、部屋の窓を「パリーン」とでも割つたりでもしてしまつたら、俺たちの罪はさらに重くなつてしまつ。しかしおれの声も虚しく、将平の腕は振り下ろされた。

バキッ！

予想外の音。窓は割れていなかつた。その代わりに、おれが細工した鍵が、ひんまげられて、将平の足元に落ちた。将平は鍵だけを壊したのだった。じつこの器用さには、いつも驚かされる。将平が窓を開ける。

「おまえらあ！ いいかげんにしろおー。」

もつ松岡が部屋の前まで来ている。

（ベランダに逃げてどうするー。）

ここは2階だ。将平も考えていなかつたようだ。その時だつた。後ろで鍵の刺さる音が聞こえた。ゾクッといつ寒気が、背中をなでた。この一年で、自分以外の人間から鍵を開けられることに、ひどい恐怖がつえつけられていた。迷つてゐる暇は無い。やつてやつひじやないか。

「将平ー。」

おれは叫んだ。そして笑った。将平がうなづく。

（おまえなら分かるだろ？ おれたちがするべきことが。）

お互いの顔がそつと言つた。おれは将平と自分のバッグを手に取つた。

力チャ

後ろで鍵が開く音が鳴つた。それと同時に、おれは走り出した。バッグをベランダから投げ飛ばした。二つのバッグが、宙を舞う。バッグだけではない。将兵も、宙を待っていた。そしておれも、ベランダの手すりに足をかけた。

後ろでドアの開く音が聞こえた。おれはまだ笑っていた。

「よつしゃあ————！」

手すりを蹴り上げ、おれは飛び出した。この縛られた環境下である、寮生活から・・・

高校一年生になつた、春の日のことだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0466b/>

---

FREE FREE FREE

2010年10月11日21時20分発行